

八重山語川平方言のアクセント体系に 関する一報告

セリック・ケナン (NINJAL)

荻野千砂子 (福岡教育大学)

五十嵐陽介 (NINJAL)

令和6年度・第2回

「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会

2025年3月15日 (NINJAL)

0. 要旨

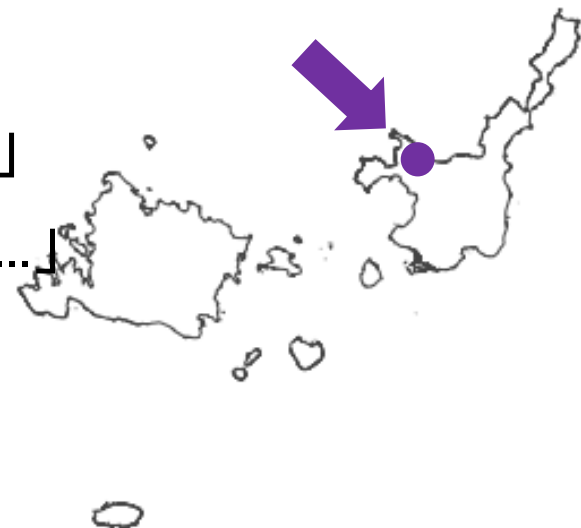
□ 八重山語川平方言のアクセント体系

- 「韻律語」が有効で、数える単位として機能
- 単純名詞は(少なくとも)2型、複合語は3型
- 「小浜式」: 高音節の有無と位置(第一対第二)

a型: (irimuti)+(munee) ... 「西表方言は...」

b型: (jamatu)+(mu[nin]) ... 「大和方言も...」

c型: (patu[ma])+(munin) ... 「鳩間方言も...」



0. 記号

● 韻律に関する記号

[上昇、語頭は、高始まり

] 下降、語頭は、低始まり

]] モーラ内下降

% 半上昇

! 半下降

() 韻律語境界

... 接続形(梓文が続くこと)

● 形態論に関する記号

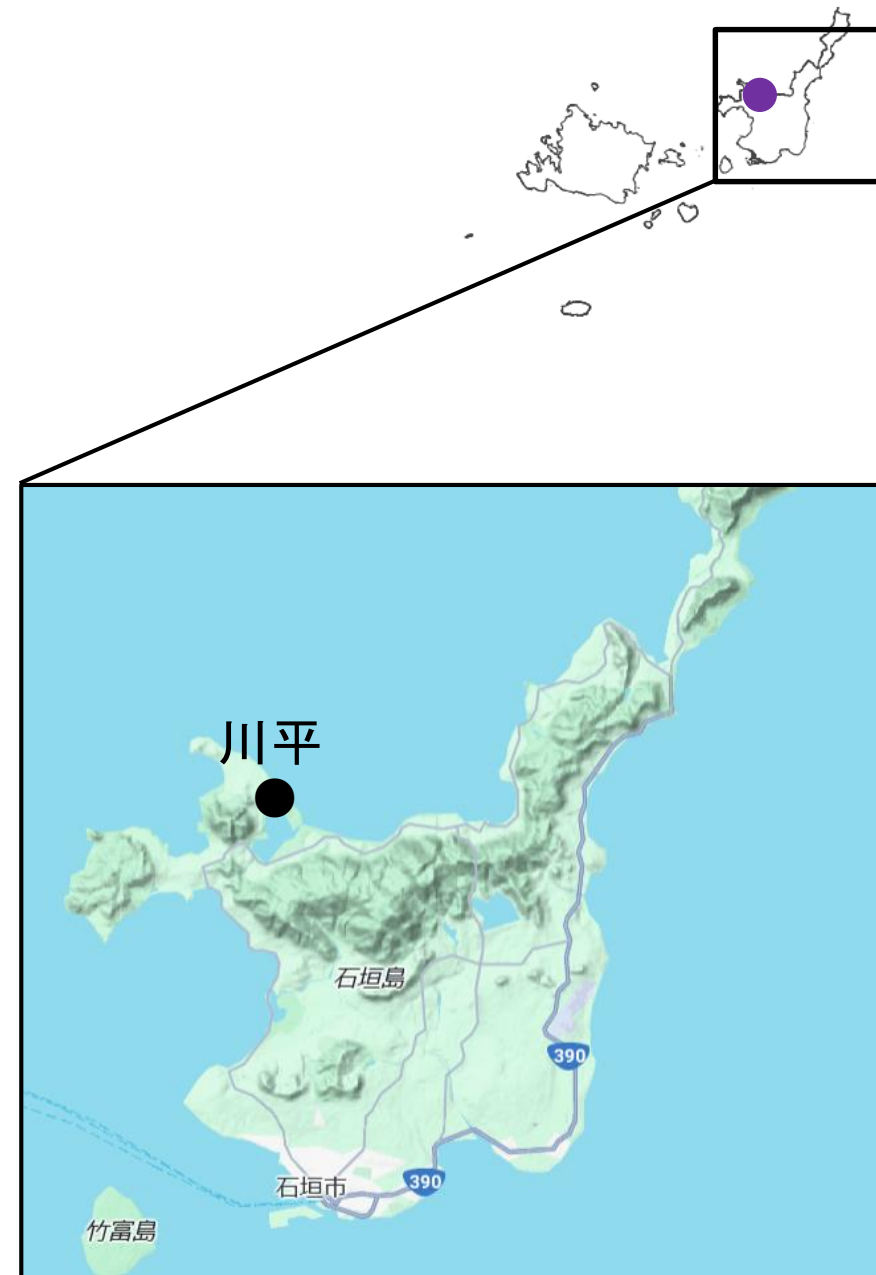
= 接語境界

+ 複合語境界

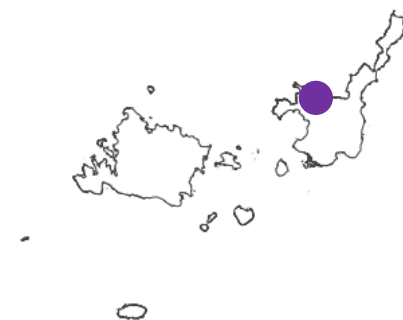
1. はじめに

□ 八重山語川平方言

- 古い集落の伝統的方言
- 八重山の古い特徴を多く保持
- 独特な音声的特徴も



1. はじめに



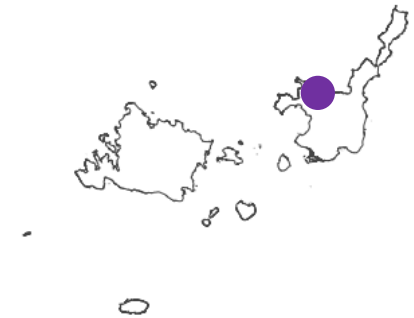
□ 八重山語川平方言

➤ 先行研究が少な目




- 総合的報告書:法政大学沖縄文化研究所(1975)
- アクセント:秋永(1960):2行、平山・中本(1964):1頁、セリック他(2021):数行
- 文法:内間(1984)、野原(1999)、荻野(2020、2022)
- 語彙:セリック他(2021):900語弱(kikigengo.ninjal.ac.jpで公開)
- その他:セリック・麻生(2024):短い会話集

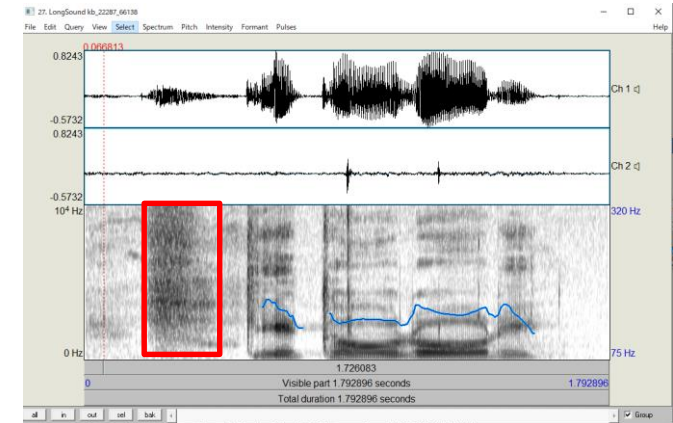
➤ 現在、調査継続中

1. はじめに



□ 八重山語川平方言

- p の衰退 ($p > h$)、i の衰退 ($i > i, u$) は見られない
- 強い無声化 (西表、新城、波照間と共通)
kani 「金」、kuri 「これ」、kama 「あそこ」 
- 前気音 (pre-aspiration) 
rukunin ~ ru^hkunin 「六人」
- *VC[-voice] > {h,f,s}VC[-voice] の音変化 (Martin 1987) cf. 今帰仁方言
hattsa 「明日」、hātu 「後」、fusi 「牛」、futa 「歌」、siki 「息」...
- 無声鼻音 (1語のみか?) 
 - ŋkee (tooroori) 「召し上がってくださいませ」



2. 先行研究

平山・中本(1964)		対応
型1 低平型]○○]○○=nu	1・2類(A系列)
型2 下降型	○[○] ○○=[nu]	3・4・5類(BC系列)

]p̚a̚ŋa,]p̚a̚ŋa=nu ...「鼻、鼻が」

p̚a̚[ŋa, p̚a̚ŋa=[nu] ...「花、花」

□ **低平型**(下がり目無し)と**下降型**(下がり目有り)が対立

2. 先行研究

平山・中本(1964)		対応
型1	低平型]○○]○○=nu	1・2類(A系列)
型2	下降型 ○[○] ○○=[nu]	3・4・5類(BC系列)

]paŋa,]paŋa=nu ...「鼻、鼻が」

pa[ŋa, paŋa=[nu] ...「花、花」

□ **低平型**(下がり目無し)と**下降型**(下がり目有り)が対立

「アクセントの高低の差が少なく曖昧アクセントになろうとしているのであろう」

「秋永一枝氏は...筆者の記述と大きな差を示すわけであるが、それにつけても、この方言のアクセント観察が、かなり困難なものであることがわかるであろう」

2. 先行研究

□ 平山・中本(1964)の問題点

- 調査範囲が狭い(2拍語の単独発話・主格／焦点助詞発話のみ)
- 近年の研究により、八重山語の殆どの方言について
 - 「韻律語」が有効で、数える単位として機能する
 - 複合語の方がアクセント対立(三型)を保持する傾向

2. 先行研究

□ 平山・中本(1964)の問題点

- 調査範囲が狭い(2拍語の単独発話・主格／焦点助詞発話のみ)
- 近年の研究により、八重山語の殆どの方言について
 - 「韻律語」が有効で、数える単位として機能する
 - 複合語の方がアクセント対立(三型)を保持する傾向

小浜方言(セリック・麻生2024a)

c型

na[bi	「鍋」
nabi=[nu	「鍋が」
na[bi]=kara	「鍋から」
na[bi=n]ge	「鍋へ」

2. 先行研究

□ 平山・中本(1964)の問題点

- 調査範囲が狭い(2拍語の単独発話・主格／焦点助詞発話のみ)
- 近年の研究により、八重山語の殆どの方言について
 - 「韻律語」が有効で、数える単位として機能する
 - 複合語の方がアクセント対立(三型)を保持する傾向

小浜方言(セリック・麻生2024a)

c型「1番目の末尾音節がH」

(na[bi])	「鍋」
(nabi=[nu])	「鍋が」
(na[bi])=(kara)	「鍋から」
(na[bi=n])(ge)	「鍋へ」

2. 先行研究

□ 平山・中本(1964)の問題点

- 調査範囲が狭い(2拍語の単独発話・主格／焦点助詞発話のみ)
- 近年の研究により、八重山語の殆どの方言について
 - 「韻律語」が有効で、数える単位として機能する
 - 複合語の方がアクセント対立(三型)を保持する傾向

小浜方言(セリック・麻生2024a)

c型「1番目の末尾音節がH」 対 b型「2番目の末尾音節がH」

(na[bi) 「鍋」

(nabi=[nu) 「鍋が」

(na[bi])=(kara) 「鍋から」

(na[bi=n])(ge) 「鍋へ」

(mami)=(ka[ra) 「豆から」

(mami=n)([ge) 「豆に」

2. 先行研究

□ 平山・中本(1964)の問題点

- 調査範囲が狭い(2拍語の単独発話・主格／焦点助詞発話のみ)
- 近年の研究により、八重山語の殆どの方言について
 - 「韻律語」が有効で、数える単位として機能する
 - 複合語の方がアクセント対立(三型)を保持する傾向

⇒八重山語のア体系を調べる際

- A) 名詞と助詞の様々な組み合わせを観察する
- B) 複合語におけるア型の対立数を確認する

3. 調査(概要)

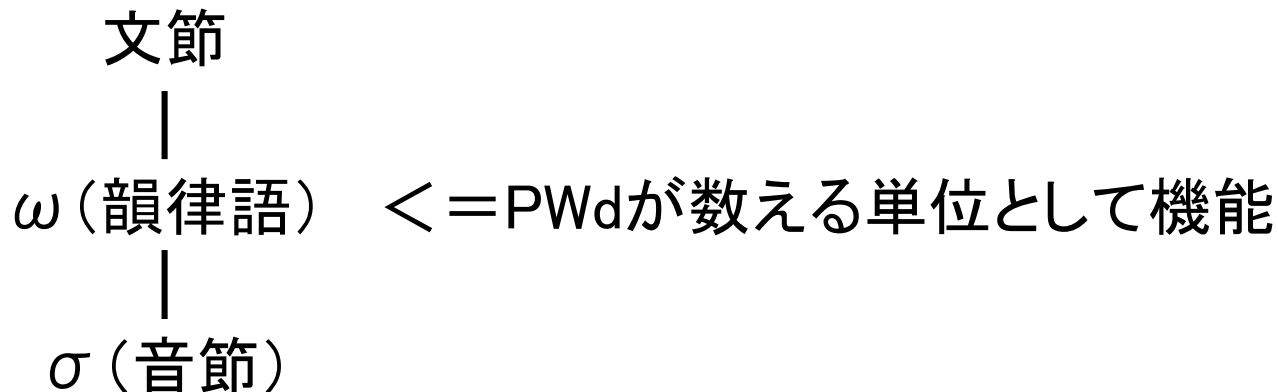
話者	生年	性	調査	期間	担当
A	S9	男	3回	2024年12月～2月	セリック
B	S9	男	3回	//	//
C	S9	男	3回	//	//
D	S5	女	3回	2024年9月	荻野

- 話者間のアクセント型の実現は一致
- 本発表は基づく予備的報告である(主にCのデータを使用)

3. 調査(結果)


□ 調査結果


	a型	b型	c型
H*	無指定	2番目	1番目
単純名詞	✓	(?)	✓
複合名詞	✓	✓	✓



3. 調查(結果)

□ 單純名詞(地名)


a型	環境	「宮良」	「西表」 
a	X.	meera	irimuti
b	X={n,a}	meera=n	irimute=e
c	X=hara	meera=hara=[du	irimuti=hara=[du
d	X=hee	meera=he=[du	irimuti=he=[du

c型	環境	「大和」 	「鳩間」
a	X.	jama[tu	patu[ma
b	X=n	jama[tu=n	patu[ma=n
c	X=hara	jama[to]=hora=[du	patu[ma]=hara=[du
d	X=hee	jama[to]=he=[du	patu[ma]=he=[du

3. 調査(結果)


□ 単純名詞(地名)

a型

環境	「宮良」	「西表」 
a X.	meera	irimuti
b X={n,a}	meera=n	irimute=e
c X=hara	meera=hara=[du]	irimuti=hara=[du]
d X=hee	meera=he=[du]	irimuti=he=[du]

低平(下降気味)

c型


環境	「大和」 	「鳩間」
a X.	jama[tu]	patu[ma]
b X=n	jama[tu=n]	patu[ma=n]
c X=hara	jama[to]=hara=[du]	patu[ma]=hara=[du]
d X=hee	jama[to]=he=[du]	patu[ma]=he=[du]


語末音節が高い

焦点助詞における卓立

3. 調查(結果)


□ 單純名詞(一般)

a型	環境	「友達」 	「川」
e	X=ndu	dusi=ndu	kaara=ndu
c	X=hara	dusi=hara=[du	kaara=ra=[du
d	X=hee	n.d.	ka:ra=he=[du


c型	環境	「主」 	「瓦」
e	X=ndu	nusi=n[du	kaara=n[du
c	X=hara	nu[si]=hara=[du	kaa[ra]=ra=[du
d	X=hee	n.d.	n.d.

3. 調査(結果)

□ 単純名詞(一般)

a型	環境	「友達」 	「川」
e	X=ndu	dusi=ndu	kaara=ndu
c	X=hara	dusi=hara=[du	kaara=ra=[du
d	X=hee	n.d.	ka:ra=he=[du

低平(下降気味)

c型	環境	「主」 	「瓦」
e	X=ndu	nusi=n[du	kaara=n[du
c	X=hara	nu[si]=hara=[du	kaa[ra]=ra=[du
d	X=hee	n.d.	n.d.

文節末音節が高い

語末音節が高い

- =nduは、高い音調がずれていくのに対し、=haraなどはずれて行かない
- e.は1つだけの韻律語、c.は2つの韻律語が形成されている環境に対応


3. 調査(結果)

□ 複合語(地名)

	a型 	b型 	c型 
環境	「西表」	「大和方言」	「鳩間方言」
a X.	irimuti+muni	jamatu+mu[ni	patu[ma]+muni
b X={a,n}	irimuti+mune=e	jamatu+mu[ni=n	patu[ma]+muni=n

3. 調査(結果)

□ 複合語(地名)

	a型 	b型 	c型 
環境	「西表」	「大和方言」	「鳩間方言」
a X.	irimuti+muni	jamatu+mu[ni	patu[ma]+muni
b X={a,n}	irimuti+mune=e	jamatu+mu[ni=n	patu[ma]+muni=n

低平(下降気味)

後部末尾末音節が高い

前部末尾音節が高い

- 3通りの対立(a/b/c)
- 位置による対立(b/c)
- 外部的対応関係が成立(cf. セリック・麻生2024)

3. 調査(結果)

□ 複合語(一般)

型	単独発話	
a	aara+kin	「新しい着物」 
	mii+kin=du	「新しい着物」
b	jari+[kin	「ぼろの着物」 
	ssu+[kin	「白い鬼門」
c	si[ra]+kin	「お産の時の服」
	ba[soo]+kin	「芭蕉の着物」 
	pata[gi]+kin	「畑の着物」

3. 調査(結果)

□ 複合語(一般)

型	単独発話
a	aara+kin 「新しい着物」 
	mii+kin=du 「新しい着物」
b	jari+[kin] 「ぼろの着物」 
	ssu+[kin] 「白い鬼門」
c	si[ra]+kin 「お産の時の服」 
	ba[soo]+kin 「芭蕉の着物」
	pata[gi]+kin 「畑の着物」

低平(下降気味)

後部末尾末音節が高い

前部末尾音節が高い

- 前部要素を共有する語は同じパターン

- mii+munu (a型)「新品」、si[ra]+tamunu (c型)「お産の薪」等々

4. 考察(音韻的解釈)

型	ピッチ変動	位置
a型	無し	(該当無し)
b型	有り	第二韻律語
c型		第一韻律語

a型 (irimuti)+(muni) 「西表方言」

b型 (jamatu)+(mu[ni]) 「大和方言」

c型 (patu[ma])+(muni) 「鳩間方言」

4. 考察(音韻的解釈)

型	ピッチ変動	位置
a型	無し	(該当無し)
b型	有り	第二韻律語
c型		第一韻律語

a型 (irimuti)+(muni) 「西表方言」

b型 (jamatu)+(mu[ni]) 「大和方言」

c型 (patu[ma])+(muni) 「鳩間方言」

● ピッチ変動をどう捉えるか？

- 「昇り核」よりも、「高核」(上野1975)として解釈可能か
- 「高核」なら、「H*」としても解釈可能(Igarashi submitted)

4. 考察(音韻的解釈)

型	H*	本発表時点の解釈
a型	無指定	
b型	第二韻律語	
c型	第一韻律語	

a型 (irimuti)+(muni) 「西表方言」

b型 (jamatu)+(mu[ni]) 「大和方言」

↓
H*

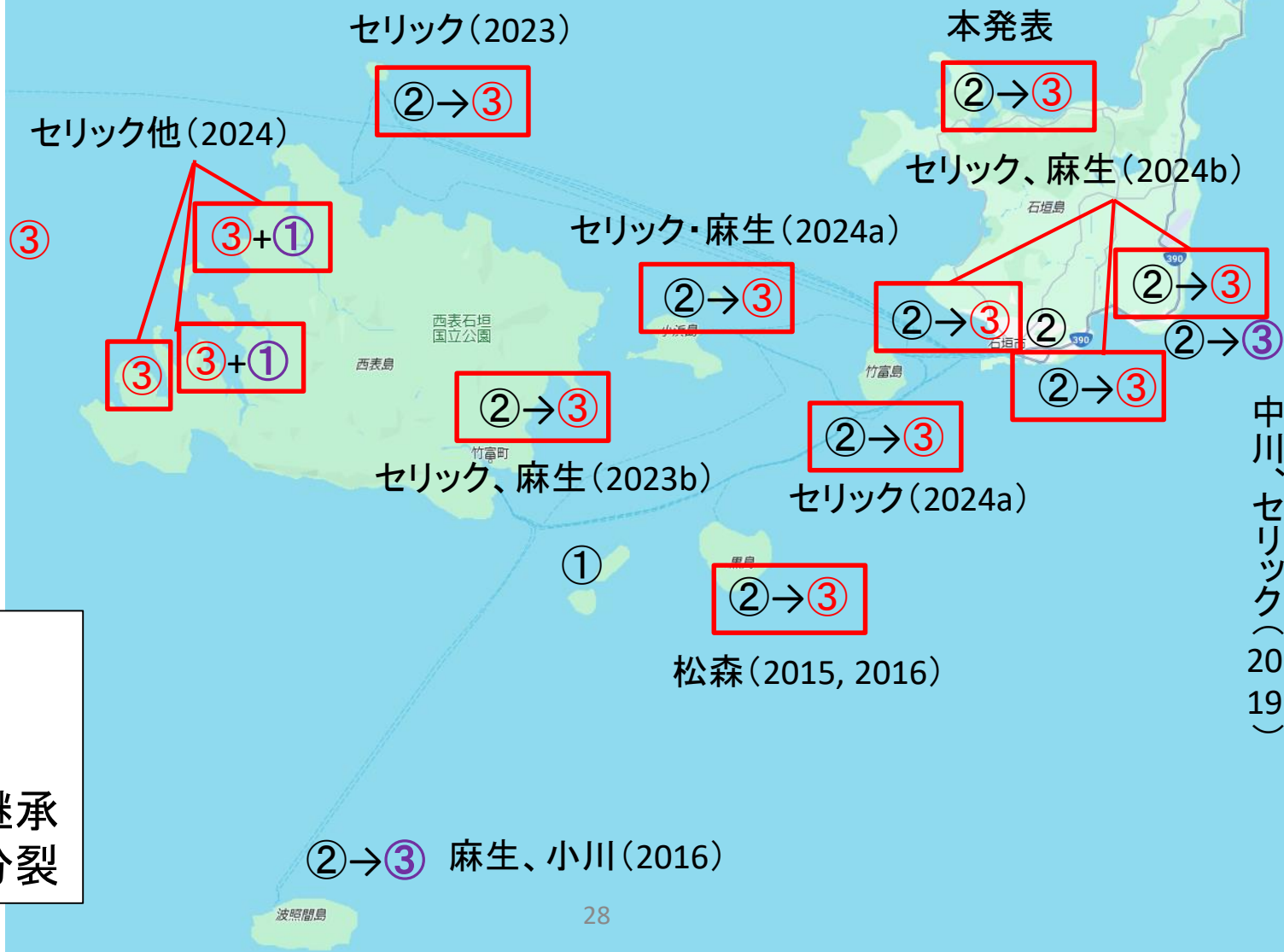
c型 (patu[ma])+(muni) 「鳩間方言」

↓
H*

4. 考察(位置付け)

- 近年の研究により、八重山語諸方言のアクセント体系を根底から捉え直されてきた

4. 考察(位置付け)



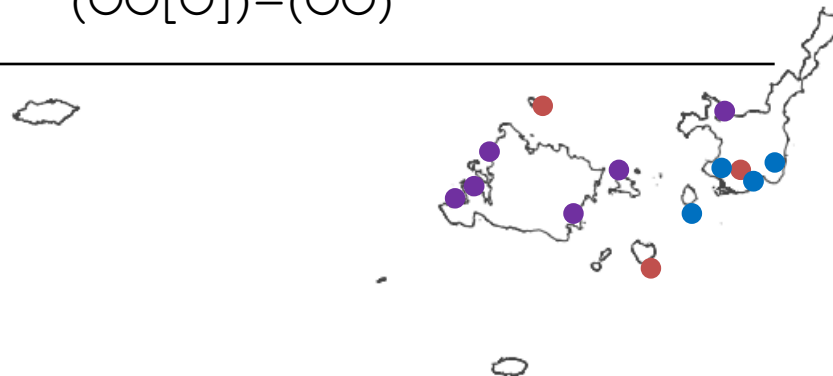
- ①: 一型
- ②: 二型
- ③: 三型
- 〇: 祖語継承
- 〇: 声調分裂

4. 考察(位置付け)

□ 韻律体系の分類

- ピッチの変動方向(上昇か下降)と韻律語内の実現位置(末尾か次末)の変数の値により、3つのタイプに分類(セリック2024b)

タイプ	変動方向	PW内位置	c型の実現
石垣タイプ	下降	末尾	(OOO])=(OO)
黒島タイプ	下降	次末	(O[O]O)=(OO)
小浜タイプ	上昇	次末	(OO[O])=(OO)



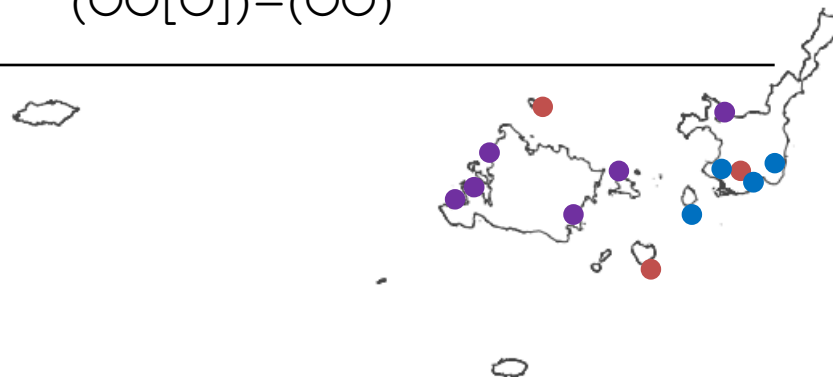
4. 考察(位置付け)

□ 韻律体系の分類

- ピッチの変動方向(上昇か下降)と韻律語内の実現位置(末尾か次末)の変数の値により、3つのタイプに分類(セリック2024b)

タイプ	変動方向	PW内位置	c型の実現
石垣タイプ	下降	末尾	(OOO])=(OO)
黒島タイプ	下降	次末	(O[O]O)=(OO)
小浜タイプ	上昇	次末	(OO[O])=(OO)

⇒川平は明らかに小浜タイプ

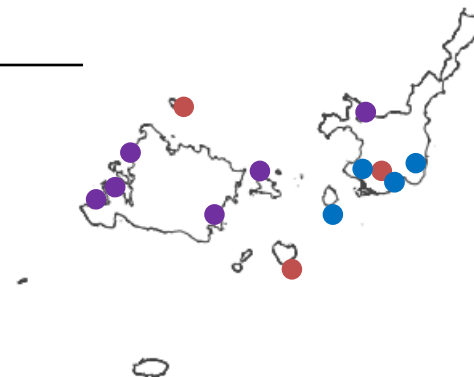


4. 考察(位置付け)

□ 韻律体系の分類

- 核として捉え素直すと、核の種類によって3つのタイプに分類可能

タイプ	核	c型の実現
石垣タイプ	下げ核	(OOO^*)=(OO)
黒島タイプ	降り核 (五十嵐ら2025)	($\text{O}[\text{O}]\text{O}^*$)=(OO)
小浜タイプ	H*	($\text{OO}[\text{O}^*]$)=(OO)



5. 課題

□ 今後の課題

- 単純名詞における対立：c型と区別されるb型があるかどうか
⇒手元のデータでは、ありそうだ
- 中和現象の整理
- 韻律語の形成規則

参考文献

省略

謝辞

国立国語研究所共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」(代表:浅原正幸)のサブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」(代表:五十嵐陽介), 同共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」(代表:山田真寛)、JP24K00070、JP24K16076、JP23K17503、JP20H01259